

に藉口する、低脳者流の模倣心を挑發せざるやの虞なきにあらず、然る恐おしとせんも、自殺せんとすまでの大決心あらんか、寧ろ天壽を全ふし、言ふべきを云ひ、行わんとするところを行ひ、永く混濁せる社會と奮闘せんか、其の功果自殺の比にあらざるべし、故に自殺は利尠なく、害多し。上述の如くなれば、此の種の自殺も亦許すべからざるを知るべく、また二例の如きも『死は罪の賃金あり』てふパウルゼンの説の是認せられ、倫理の定説とあらざる限り容るべきに非らず。彼の如く自己の罪科を償ふことをせず、剩へ死によりて其責域を逃れんとする素より斷じて、許すべきものにあらず、寧ろ大々的に社會制裁を加へざるべからず。翻て思ふに我等の生は、本佛の妙用にして、本有の佛性は修養により其光輝を彌顯はさんとせり。然るに勇猛精進の慨を欠くが故に徒らに本佛の力用を無視し、佛性を失ひ剩へ社會の嘲罵を招くに至るや論なし、かくの如きは我等本化門下の絶對に排斥すべきとす、然れども予は徒

らに、生に執着せよとはあらず、吾人の死すべき時ある事をは、特に闡明せんとす、本化の旗印は不惜生命但惜無上道あり、故に予は爲國爲法てふ、唯一の大道の御爲の死は、是認否讚嘆するところなり。これ法花經的の死にして本佛の妙用に應へ肉に死し、靈に活くる所以ありとす。

茲に於て余は云はん、本化門下は道の爲と云ふ大信念を有し、且つ其自殺は生に勝れるの確証あるにあらざれば、絶對に可とすべき自殺なし。寧ろ無意義に生を捨つるもの、如きは、社會制裁によりて覆轍者流を絶滅せざるべからず、最後に記憶すべきは、『妙とは蘇生の義なり』との一大真理ありとす。——(なほり)——

日常生活と信仰の必要

川 口 智 隨

我々は如何にしたならば、此の一生一年一月乃至日常の生活を、面白く意義ある價值ある生活を

して過し尙最後臨終の時に至つて、何の心残りもなく、安心に終る事が出来るであらうか、此の事は世間一般の人が此の問題を或は解決し、或は未解決の儘に持つて居る事であらうと思ふ、今其の日常生活に就て少しく考へて見るに、日常生活をして行く上に就て、第一必要なるものは何か財力第二に信仰であると思ふ、或は信仰第一と謂ふけれども、予は信仰は第二とす、信仰は有つても財力なくば、生活して行く事が出来なくある、生活する事が出来なかつたならば、折角の信仰も出来ざる様にある又如何に財力は澤山あると雖も、信仰がなかつたならば、何んの價値もないのである所謂價値ある意義ある光輝ある、生活を送り安心して臨終する事の出来るのは、信仰に依らなくてはならん、其の信仰とは如何なるものであるかと謂ふに、即ち信心である、それでは何にを信心すればよいか、即ち諸經中王最爲第一の法華經を信心すればよい、何故に法華經が諸經中王最爲第一であるかと云へば、其の一端を演ずるに、釋尊一

代の說法化導は、五十年の間である、其中華麻經三七日の間説き、阿含十二ヶ年方等、十六年般若十四年の間加様に、四十二年の間說法化導なされて、一會の大衆に向つて釋尊申される様今迄華麻阿舍方等般若と四十二年が間の說法したが、是れは未顯眞實と申して、權利方便の爲めに説いた處の經である、是より初めて一再衆生が迷へるを救くつてやる事の出来る、又娑婆世界に出顯せし本懷の經を説くのであると謂つて、御説き遊ばされたのか、此の八ヶ年間の法華經である、法經の中にも有るが如く、受持法華名者福不可量云云法華經の名を聞くものにも功德がある、況んや受持するものに於ては、福德計るべからずとあり、又法華經を持つ者は、現世安穩後生善處と云つて此の世は安穩で又後の世には善き果報を得る事が出来ることあり、斯様にありがたい處の法華經であれば諸經中王最爲第一とするのである、此の法華經を信仰すれば、意義ある價値ある生活が出来るのである、宗祖上人は佐渡の流罪或は龍口の刑場にあ

りながら、今生の善をば笑へよかし、日頃待ち居りし事であると仰せられて、驚く景色も無かつたのである、是れは決して喜では無い、而し宗祖に堅固ある信仰があつた爲に、苦も轉じて喜とあつたのである故に、我々日常生活をして行く上に就いて信仰があれば、日常の苦も樂と轉じて一家和合の世とあるのである、故に日常生活を成す故に就いて信仰が大切である。

濁末の靈光

中村義明

佛日、一度西天に没してより、其聖教は月の西より出で、東を照らすが如く、漸次東國に流傳せられたり。貝多羅葉に書れたる梵本は、世々の三藏によりて、漢譯せられ、解脱涅槃の教義は代々の四依の論師によりて、各其の時代の思想を感化

せり。かくて、佛教は世界人類を救濟すべき光明とありぬ。されど、其の光明は日出る迄の月の光明なりしなり。正像二千年時勢の變遷は、漸く其の光明を没したり、見よや迦葉阿難によりて傳へられし小乗も、馬鳴龍樹に依りて弘められし大乘も、疾く宗教としての生命を亡ひ、天台傳教によりて傳ひられし一念三千も、弘法慈覺の弘めし論伽三密も、教義高尚に、修行煩瑣に過ぎ、周く後人をして、眞摯に、修行する能はざらしめ、一種の學問となりたりしに非らずや、佛在世より正法に涉り、教行証兼備せる佛教は、其末に及び証果を得るものなく、更に像法の末期に至りては、眞に修行する人だになく、幾多の經論ありと雖も、そが人生の光明とはならざりしあり。是の如くにして、印度の佛教先づ滅び、唐土の佛教次で衰へ日本に弘まりし南都六宗、北京の二宗も、徒に形骸の佛教となり、世は五濁末法の暗雲に覆はれたり。

此時に當り、法然親鸞相尋で、念佛往生他力本